

新潟県知事賞

おじいちゃんとりハビリ

新潟市立亀田東小学校

四年 松本護也

ぼくは、夏休みや春休みのような長い休みになると、おじいちゃんの家に行ってリハビリをします。どんなことをするかといえば、二人でさんぽをします。ぼくと、おじいちゃんのさんぽのことをぼくたちはリハビリとよんでいます。

おじいちゃんは、何年か前に、病気になって片手と片足がうまく動かせなくなりました。それまでは、元気に、追いかけてごっこもできたのに今はできません。ぼくが、オニで追いかけても、すぐに追いついてしまいます。階段もゆつくりと気をつけながら、下りたり上ったりしています。リハビリを一生けんめいにがんばらないと、元にもどらないみたいです。ぼくは、おじいちゃんが、前みたいに早くもどったらいいなと思っています。だから、ぼくも一生けんめいにリハビリを手伝っています。

ぼくたちのリハビリの道は、決まっています。おじいちゃんの家を出発して、遊歩道のふん水の前を通って、コンビニまで行きます。コンビニはちょうど半分くらいのきよりです。ぼくたちは、そこで、アイスクリームを買います。それから、同じ道に戻って、ふん水の前まで来たら、ベンチに座ってアイスクリームを食べます。おじいちゃんは、もなかのアイスで、ぼくは、お母さんにはぜったい買ってもらえないような、少し高いアイスクリームを食べます。おじいちゃんは、リハビリのお手伝いをしたかわりに、ないしょで何でも好きなものを買ってくれます。やさしいです。

休けいが終わったら、また、歩き始めます。ぼくは、アイスクリームを食べたら元気がいっぱいになるけれど、おじいちゃんは、帰り道になると、少しつかれたように歩きます。だから、ぼくは、おじいちゃんの手をひっぱってみたり、後ろからおしたりして、歩くのを手伝います。車が通りすぎる時は、おじいちゃんに教えてあげて気をつけるように言います。おじいちゃんがぶじに家に帰れるように、せいっぱいのことをします。

おじいちゃんは、リハビリはあまり好きではないみたいだけれど、ぼくがいつしよに行こうとさそった時だけは、いやがらずに歩いてくれます。汗をかきながら、がんばって歩いてくれます。ぼくは、がんばっているおじいちゃんが大好きです。もしも、アイスクリームをとちゅうで買ってくれなかったとしても、ぼくはお手伝いしてあげたいと思います。たくさんリハビリをしたおじいちゃんが、前みたいに走ったりできたらいいなと思います。おじいちゃんと、前みたいに思い切り遊んでみたいです。そして、大好きな山登りをもう一度させてあげたいです。

ツナグ幸せ

長岡市立青葉台中学校

二年 江口 りり子

予想もしていなかった突然の休校……。不安と少しの憤りを感じながらも、何もしない自分とは違い、我が家では朝から両親が出かけるギリギリの時間まで家事をし、帰宅後も休む間もなく夕食作りをする姿があった。こんなにも親が協力し合って私を育ててくれたのだと気付いた時、食卓に用意されている食事を当たり前のように食べていた今までの自分が恥ずかしくなった。

休校で家にいた私は、親がしていた家事を見様見真似でやったところ、親はとても喜んでくれた。こんなことで喜んでくれるのならばと調子に乗った私は、家庭以外で自分が役に立てることはないかと考え、最近メディアでもよく耳にする「ヘッドネーション」に協力しようと考えた。私にしたら小さな挑戦だった。

今まで美容院に行けば、「太くて量も多くて立派な髪ね。」と必ず言われることが本当に嫌だった。友達のようにふわふわで人形のような髪に生まれたかったと親に不満をぶつけたこともあった。でも、この髪で役に立てるならばと髪を切る決心はおかげで容易に出来た。美容院で髪を切る時、いつも通りの誉め言葉をもらったが、あんなに嫌だったその言葉も、この髪だから大丈夫と言われているような気がして、初めて自分の髪を誇らしく思えた。調子に乗ってメディアに影響された私の小さな挑戦は、私の大きな自信に変わったのだ。

美容院の帰り道は、その自信と一緒に髪の毛を送ってしまおうと、貯めたお小遣いを持って窓口へと向かった。受付で荷物の中身を確認された私は、髪の毛だと自信を持って伝えると、受付の方が明らかに「えっ？」という顔をしたのがわかった。時間にしたら数秒だったが、その間がとて長く感じた私は、急に自信がなくなり言葉が出ず、立ちつくしてしまった。後ろで待っていた親が見かねて「ヘッドネーションに協力したくて！」と答えてくれた。おかげでその場の空気は元に戻ったが、私の気持ちは沈んでしまった。帰りの車中では落ち込む私に、「最初から完璧にやれる人なんていないから大丈夫。」と励ましてくれる親の言葉に、私はハッとした。私が人の役に立てると考えた「ヘッドネーション」は、協力するまでに美容院で私の希望通りに髪を切ってもらい、親からは美容院や発送に連れて行ってもらった。私一人では何も出来ていなかったことに気付いたのだ。

しかし、中学生の私に出来ることはこれが精一杯だとも思った。出来る時に出来ることをやる、これが今の私に出来ることのはずだ。私の嫌いだっただ髪の色が、色々な人の力を借りて、頭髪に悩みを抱える人への幸せに繋がって欲しいと願ったことは、私の勝手な自己満足なのかもしれない。でも、人は一人では何も出来ないということ。人は助け合って生きているということ。当たり前前の日常が幸せだということ。多くのことに気付かされた休校期間だった。

僕にできること

柏崎市立瑞穂中学校

二年 濱田悠斗

僕の祖父は癌だ。ステージ四b。そう聞いたのは去年の秋だった。肝細胞肝内胆管癌という病名で二週間に一度、化学療法をしている。

僕の祖父は福島にいる。九年前の東日本大震災を経験していて、原発から二十キロ圏内に家があったため、原発事故で住めなくなった。避難解除が出るまで、地元から離れた場所で生活していた。少しの間だけでも、僕の住んでいる柏崎にも来た。福島の人とは、ほとんど街に帰って来なくなり、祖父の自営業の仕事も廃業した。除染が終わり、避難解除されると、祖父は地元に戻ることにした。初めは、復興を目指す町の防犯パトロールに取り組み、しばらくすると、猪がたくさん出ることを見かねて、銃の資格を取り、猟友会に入った。猪の罨を仕掛けて毎朝、見に行くのが日課だ。

祖父は多趣味だと聞いた。僕が知っているだけでもパラグライダー、巨大なラジコン飛行機、溪流釣り、猟銃などいくつもある。虫を捕まえるのも得意だ。僕が小学生の時、一緒に出た昆虫採集大会では二位になった。その時もらったトンボのオブジェは、今でも部屋に飾ってある。僕の宝物だ。

病氣のことを聞いてから、僕は頻繁に福島に帰るようになった。僕が帰ると、山に連れて行ってくれる。猪の足跡や撃ったキジなどを見せてくれる。冬に初めて猪がかかったのを見た。七十キロもあり、運ぶのも一苦労だった。帰れない時は手紙を書いた。帰れない

理由と写真を撮って入れた。「病氣平癒」のお守りも送った。

最近では、僕が帰っても寝ていることが多くなった。痛みを訴えるのも多くなり、病院へ行くのも増えた。それなのに僕が帰ると、僕のために釣りなど、いろいろな場所に連れて行ってくれる。ここではあまりできないことも祖父とならできた。食欲がなくなった祖父に祖母は、祖父の好きなごはんを作ってあげる。僕の母は介護の仕事をしているので、サービスのことも教えている。みんながそれぞれ祖父のことを考えてできることをした。祖父は「今住んでいるここで死にたい」と言った。新潟に母が呼んだけど、断られた。近くに病院もスーパーもないところの何が良いのだろう。

僕は一体何ができるのか考える。僕ができることは祖父に将来の夢を話すことや、祖父の猪の罨の回収のアシスタントをするくらいしかない。「あと五年たったら、車の免許を取っておじいちゃんを乗せてあげる」とかそんな話。祖父は嬉しいのかな。中学生の僕ができることを一生懸命考える。僕は今祖父とのかけがえのない時間を大切にす。

祖父は最後まで自分らしくありたいのだと思う。山に行ったり、友達と過ごしたり、家族との時間を大切にしたり。僕との過ごす時間もそうだ。とても辛そうな時もあるけれど、少し体調が良い時に一緒に過ごす時間はとても大好きな時間。とても穏やかな、祖父と過ごす特別な時間。いつも祖父のまわりには笑顔があつて、たくさんの人に愛されていると僕は思う。

とつさに動いたぼくの足

長岡市立青葉台小学校

四年 宮下 音奏

ゆっくりゆっくり歩くおじいさん。周りの人は、どんどんおじいさんを追い込めていく。中には、

「じゃまなじいさんだな。」

心のない言葉をかけて、わざとぶつかるように、ぬきさつて行った人がいた。おじいさんは、よろめいて転んでしまった。

その日病院に入るのがあと五分という時間で、しんさつけんを出さないと間に合わない。でも自分の目の前で、おじいさんが転んでしまった。ぼくは、どうして良いか頭の中がパニック。でもとつさに声をかけていた。

「あー。だいじょうぶですか?」

「ブー。イタタタタ：歩けんわい。」

そう言いながら、おじいさんは立とうと必死に動こうとするが動けない。車のとめる所がなくお母さんはまだ来ない。すぐく頭の中がパニックだった。でもあともう少しの病院の入り口までなら、自分でもおんぶ出来るかなと思って、おじいさんをなんとか立たせ、ぼくの背中に乗ってもらった。おんぶもうまく出来ないぼくは、よめきながらおじいさんを三十メートル位おんぶして連れてきた。

「すみませーん。」

と何度かよぶと、受付の人が出て来た。ぼくは、説明して、おじいさんをおろした。

「あ！自分のしんさつけん入れるの忘れた！どうしよう。」

と、自分のことをするのを忘れてしまった。まだ中には、かんじゃさんが何人かいたのでそおと中へ入った。すると受付の人に、「めろ君。すごいねー。人助けしたんだね。おじいさん、あのぼちゃんにお礼を言いたいわって言ってしんさつ室に入って行ったよ。」と言われた。それよりぼくは、しんさつけんがだせなくて、お母さんにおこられると思つてふあんな顔をしていると、

「めろくんのしんさつもちゃんとするから。」
と言ってもらえた。

少しして、お母さんが入って来たけれど、お母さんは、この事を知らない。しばらくしてぼくの番になった。しんさつは、一番最後。先生は、ぼくを思いつきりほめてくれた。そしておじいさんが帰りに、

「よそのじいちゃんを心配してくれる子、なかなかないぞ。ほんとうにありがとう。」

といいながら、深くおじぎをしてくれた。

ぼくは思った。とつさの時つて何も考えず体が動くんだ。言葉より体が動いてしまった。人見知りのぼくでもできたんだと、ちよつぴりてれくさくて、まんぞくだった。後からお母さんが来て話を聞いてぎゅつとだきしめてくれた。ぼくは自分に言いきかせた。

「思いやりの助けつて考えるより行動しちゃうんだ。」

ぼくは、うん、うん、とうなずき、ちよつぴり大人になった。

「出来ない」は「出来る」に変わる

新潟県立直江津中等教育学校

二年

岡

侑衣子

私には小学五年生の妹がいます。私がまだ三才の頃に産まれました。当時まだ一人っ子だった私は、初めて妹が出来るという喜びで胸がいっぱいでした。しかしその三日後、丁度私の誕生日に、妹は呼吸が出来なくなりました。NICU(新生児集中治療室)に入院し、呼吸器をつけて過ごすようになりました。口からは栄養を取ることが出来ず、鼻から点滴のようなものを入れて飲んでいました。また、心臓が止まってしまいそうになったこともありました。その度、幸いにも医師や看護師の手当てで一命をとりとめてきました。妹のいるベッドには、いつもたくさん機械や管があります。それを見るたび、妹が毎日を一生懸命に生きていることが伝わってきて、自身も頑張らなくては、と励まされます。

妹は今、病院に併設された特別支援学校に通っています。しかし、歩いて校舎に行くことは出来ないのです。先生方が病室まで来てくれます。妹は運動会では、歩いたり走ったりすることは出来なくとも、テレビ電話で体育館へ出向き、自分の手を懸命に動かして遠隔操作で野球やボーリングなどの競技に参加します。文化祭では自分で作った絵や版画などの作品を展示します。そんな妹を見てみると成長に幸せを感じると共に、「出来ない」は「出来る」に変えることができるのだと感じます。どうしても不可能だと感じてしまうこともあるかもしれませんが、そこで諦めるのではなく、方法を工

夫していけば必ず可能にたどり着けると妹は教えてくれました。また、日々進化を続ける医療技術、特別支援学校の存在など、たくさんの医療や福祉、教育の支えのもとで妹は充実した暮らしができていたのだと知りました。

私にとって妹は人生の先輩のような存在です。たくさん壁を乗り越え、今この瞬間も一生懸命に生きています。命の重さ、福祉の重要さを知る事は今後私が社会へ出てからの生活にも役立つと思います。人生において大切なことを教え続けてくれる妹に感謝し、これからも全力で家族みんなと支えていきたいです。

私には今、とても気になっている職業があります。それは作業療法士(OT)です。作業療法士とは、何らかの理由で日常生活に関わる活動(食事、着替え、家事など)がうまく出来ない人を様々な方法でサポートする職業です。また、身体だけでなく精神面に対してもアプローチを行い、患者が自分らしく生き生きとした生活を送れるよう心と体を支えていきます。実際妹の授業で使われている道具は、一人の力でも動かせるよう作業療法士によって改造されています。作業療法士は「出来ない」を「出来る」に変える。そして「出来ない」が「出来る」に変わる瞬間に立ち会えるすばらしい職業だと思っています。私も出来なかったことが出来るようになる感動を何度も経験してきたので、すばらしい瞬間に立ち会え患者やその家族に感謝される、そんな職業にすごく魅力を感じます。

「出来ない」が「出来る」に変わる。それは誰しもが心から喜ぶことです。私は将来作業療法士のような医療関係の職業について、その感動をたくさんの人に届けたいです。そして一人一人が自分らしく生きていける福祉社会の実現に向けて貢献していきたいです。

ぼくとあーちゃんのやくそく

胎内市立中条小学校

一年 伊藤 彪 柁

ぼくはおばあちゃんのことをあーちゃんとよんでいます。あーちゃんはおくがうまれるまえにひだりあしのほねをおるけがをしてしまいました。いたいあしをかばってあるいていたらこんどはみぎあしもいたくなってしまいました。

ぼくがねんちゅうのときにひだりあしにじんこうかんせつをいれるしゅじゅつをしました。ぼくがねんちゅうのときにはんたいのみぎあしにじんこうかんせつをいれるしゅじゅつをしました。でもあーちゃんのあしはとでもいたそうです。

ぼくはあーちゃんがあるくときすこしまえにでてかたにつかまらせてあげます。おじいちゃんとあーちゃんはまいにちよるさんほをします。ぼくがいつしよにさんほするときはあーちゃんのあしもとがよくみえるようにライトでてらしてあげます。あしがいたいといっているときはほしいところをさすってあげます。

かいだんのほりおりのときもぼくがあーちゃんのまえにたつてころばないようにかたをかしてあげています。

なつやすみにはいるまえに、がっこうからおかまちにあるキナーレをしようかいするプリントをもらってきました。なつやすみにはいるまえからキナーレのスタンプラリーをパパとママとぼくと三にんではじめました。スタンプラリーのなかにきよつきょうトンネルというところがあったってみました。くらいトンネルのなかに

はいるとひんやりつめたくながいながーいトンネルがあるきはじめました。みどりやきいろやあかやオレンジやおのライティングのなかがあるきつづけやとたどりつきました。そこはパノラマステーションライトケープ（ひかりのどうくつ）です。トンネルとけしきがすいばんきように、ままるくらきらとみずのゆかにうつつとつてもきれいでかんどうしました。ぼくはいくまえにあーちゃんをいつしよにいとさそいました。いきたいけどあしがいたくてむりだな…とかなしそうにいました。でもトンネルのいりぐちにくるまいすがおいてあることにきがつきました。あーちゃんにぼくがくるまいすをおすからこんどいつしよにぜったいパノラマステーションライトケープひかりのどうくつがすつごくきれいだからそのけしきをみようねとやくそくしました。

あーちゃんはあしがいたいからこれからもぼくができることをてつだってあげたいです。ほかにもからだがあふじゆうでこまっているひとがいたらぼくができることをてつだってあげたいです。